



甲南大学に建立された災害記念碑(1997年)

常二備へヨ

旧制甲南中高校生に対する訓示
1938年

ひやく
せい
ふ
ま
百世不磨

其ノ四

社会に必要とされる人物の育成をめざし、教育に情熱を注いだ創立者平生鈇三郎の教え。その数々を、永遠に消えることなく、存在し続けるさまを表す「百世不磨」という標題にたとえ紹介いたします。

甲南学園創立者

平生鈇三郎のことば

1866(慶応2)年〜1945(昭和20)年

実業家として東京海上保険をはじめとする損害保険業界の近代化に貢献し、川崎造船所の再建にも携わる。その傍ら、政府の命を受けブラジルへの経済使節団団長を務め両国の親善友好にも貢献。また、甲南病院の設立や、相互扶助の精神に賛同し灘購買組合(現生活協同組合コープこうべ)の結成に尽力するなど社会事業にも情熱を傾けた。さらに、政界では文部大臣を務めるなど、多方面で精力的に活躍するが、教育事業家・教育者であることを天職とし甲南学園を創立した。



阪神大水害後、復興勤労奉仕作業の様子「阪神地方 水害記念帳 復刻版」甲南高等学校校友会編纂(神戸新聞総合出版センター)より

1938(昭和13)年7月の阪神大水害で甲南学園は校舎も埋まる大被害を受けました。「常二備へヨ」は、学園が復旧に立ち上がる時、当時の旧制甲南中高中生に平生鈇三郎が訓示した言葉です。甲南小学校のものは、阪神大水害5周年を記念して平生の揮毫によって出来ました。碑文には「住吉川其ノ害最モ甚シク、洪水兩岸ニ溢レテ、本校ヲ襲ヒ、校舎殆ド破壊シ、為ニ可憐ナル学童四名附添一名、溺死ノ惨状ヲ見ルニ至ル」と記されていますが、痛恨の災害を憂慮し、堅牢なる新校舎再築を記念して石碑を建てたのです。甲南大学のものは、1995(平成7)年1月の阪神淡路大震災により学舎が壊滅的な損害を受けた2年後に出来ました。学生・卒業生ら38名の犠牲、教職員・学園関係者の甚大な被害等の惨劇を乗り越え、学園の総力をあげて新校舎が再建されました。その時、甲南学園は平生の57年前の遺訓「常二備へヨ」を想い起して、将来に万全を期するために碑文として刻んだのです。大学構内の新設となった白亜の二号館前に記念碑は建っています。新たに

「天の災いを試練と受け止め、常に備えて、悠久の自然と共に生き、輝ける未来を開いていこう」の言葉を加え、改めて甲南学園の決意として象徴的に刻まれています。

寺田寅彦は阪神大水害の教訓を基に「天災は忘れた頃にやってくる」と言いましたが、「常二備へヨ」は備えの足りない状況を警告し、天災だけではなく、多くの人災に対処した平生の人生体験から生まれた言葉であります。それは平生が、財界や教育や政治に関係して新規の事業を起こすと共に、先人の失敗を正す再建や復旧の任を負う仕事が多かったからとも言えます。降りかかる大小の災害に「備えあれば憂いなし」ということでもあります。自然災害だけではなく、社会に生きていくための知恵・技術・倫理等も備えよと言っているのではありません。生涯40数年にわたって日記を書き続けた行為とその内容から推して、平生には日頃から日々の省察を通して将来への展望を見出そうとする鋭い洞察力と適切な判断力がありました。未来を切り開くためには、過去を見極め、どのように対応し、切磋琢磨して実行するか、それが「常二備へヨ」の内実でありましょう。人生における理想の追求は青年を教育する時の平生のモットーであります。「常二備へヨ」は、甲南学園の教育方針である「個性の尊重と自立」を学ぶ青年が、己の志や理想に向けて邁進し、「世界に通用する」人間となるための、基本的に大切な教訓であります。

第十五代甲南大学長・甲南大学名誉教授 高阪薫

「新平生鈇三郎のことば」(甲南大学編)より